

デカルトとルネサンス・プラトニズム

名須川 学

書簡そのものは失われているために、その問い合わせの内実について
は現在に至るまで不明である^[2]。例えば、一六三〇年四月一五日付
メルセンヌ宛書簡には、次の様にある。

(...) 諸々の数学的真理——あなたはそれらを「永遠的」と
称していますが——は、それ以外の諸々の被造物と全く同
様に、神によって据えられ、神にすつかり依存しています。
(AT-I, 145.7-10)

また、この「永遠真理」は、「我々の知性に植え付けられ
し」にちりて、ルネサンスを経てアリストテレス＝トマス主義
のスコラ哲学と競うようにして現れた「アウグスティヌス主義
的プラトン主義」の様相に主として光を当て、これとの対比に
よって、デカルトの思索の特徴を浮き彫りにすることを試みる。

一 「永遠真理」を巡って

この「永遠真理」という概念は、メルセンヌからの問い合わせを
機会に一六三〇年の四つの書簡に現れる^[1]。しかし、メルセンヌの

書簡そのものは失われているために、その問い合わせの内実について
は現在に至るまで不明である^[2]。例えば、一六三〇年四月一五日付
メルセンヌ宛書簡には、次の様にある。

(...) 諸々の数学的真理——あなたはそれらを「永遠的」と
称していますが——は、それ以外の諸々の被造物と全く同
様に、神によって据えられ、神にすつかり依存しています。
(AT-I, 145.7-10)

また、この「永遠真理」は、「我々の知性に植え付けられ
し」にちりて、ルネサンスを経てアリストテレス＝トマス主義
のスコラ哲学と競うようにして現れた「アウグスティヌス主義
的プラトン主義」の様相に主として光を当て、これとの対比に
よって、デカルトの思索の特徴を浮き彫りにすることを試みる。

捉えている内包がズレているといふに気がつかねばならない。これに關して、一六二三年にはその全体がほぼ完成し出版の準備に入りながらも、ガリレオ(Galileo Galilei, 1564-1637)の有罪判決の知らせを受けて刊行を断念した『世界論 Le Monde』第七章の記述は、ある示唆を与える。

(….)しかし、私は以下のことを読者に告げることで満足するといつよひ、即ち、既に説明済みの運動の三法則を別にするならば、これら諸々の「永遠真理」(数学学者らは、これに基づいて、自分たちのより確実でより明証的な論証をすることに馴染んでいる)に誤謬なく従うようなもの以外の如何なるものも、想定したくはないといつよひ。これらの真理は、言つてみれば、これに従つて、神に自身が、「神が万物を数と重みと嵩において配された」といふことを我々に教えられたといふのものなのである。(AT-XI, 47)

こには、「永遠真理」と「数学的真理」と「啓示的(もしくは聖書的)真理」の三つの関係が述べられてゐるが、こひでデカルトが考える「永遠真理」とは、「数学的真理」及び「啓示的真理」と独立しながらも、「数学的真理」を基礎付け、「啓示的真理」を明かすような何らかのものである。こひがいも、デカルトの考える「永遠真理」とメルセンヌの考える「永遠真理」とは明らかに内包の異なるたるものだといふことが理解される。今「啓示的真理」と記したが、それは、この引用箇所において、デカルトが旧約聖書〔第二聖典〕『知恵の書』第一一章第二

○節(もしへは第二一節)の「あなたは全てのものを嵩と数と重みにじみて配した omnia mensura et numero et pondere dispositi」を直接引用しているからである。このもとにデカルトが自らの著作の中で聖書の一節を直接引いてゐるのは、むしろ例外中の例外である。

デカルトとメルセンヌの双方にとつて馴染みの深いイエズス会における数学改革を推し進めたのは「当代のヨークリッジ」と称されたクラヴィウス(Christoph Clavius, 1538-1612)であつたが、彼は一六一～一六二一年にかけて『数学著作集 OPERA MATHEMATICA』(全五巻)を刊行している。その「扉絵」にはクラヴィウスその人の肖像画の下に、"Dedit mihi Deus ut sciam anni cursus et stellarum dispositiones Sap 7" と記されてゐるが、これは既出『知恵の書』における第七章第17～十九節の内容を集約したものであり、当時のキリスト教社会において、世界の数理的構造認識の根拠が、この『知恵の書』の内容によつて与えられていたといふことを証左する有力な資料となつてゐる。

デカルトが『世界論』を執筆していた時期、これと並行して、メルセンヌは大著『普遍的ハルモニア Harmonie Universelle』(一六二六～一六三七年)における主題に取り組んでいた。

この著作の「リズムについて」の章の命題三三三には、アウグスティヌス(Aurelius Augustinus, 354-430)の『音楽論 De musica』に展開されたリズムの数理構造における問題が七頁にわたりて延々と紹介される。注目すべきは、メルセンヌは、「宇宙の詩 carmen universitatis」に関して述べられる『音楽論』第

六巻一一章二九〇節を引用した直後、「純粹数学」なるものは「質料」や「時間」や「運動」を越えてあると指摘し、更には、神は「その永遠性を我々の知性(esprit)に刻み付けた」と明記しているという事実である。⁽⁴⁾

このときメルセンヌは、アウグスティヌスが『三位一體論』第四巻第二章四において、「協和 consonantia」の原理に関するして、数的原理としての「ハルモニア」が「私たちに本性的に(naturaliter)植え付けられている」と述べたことを受けていたに違いない。メルセンヌがアウグスティヌスの数的秩序論を踏襲していたということは、『普遍的ハルモニア』の「協和音について」の章命題八系一において、唯一なる神の三つの位格である父・子・聖靈がどうして唯一の本質に一致するのかを協和音に用いる比例に基づいて説明していることに加えて、同じく「協和音について」の章の命題一一系一において、アウグスティヌスが『キリスト教の教義について De Doctrina Christiana』第一巻第五章に述べた「父には一性(vitatis)が、子には相等性(aequalitas)が、聖靈には一性と相等性の協和(concordia)がある」を引きながら、「三位一体」における「三つの位格にして一つの実体 tres personae, una substantia」の構造を協和原理をモデルとして説明していくことからも確実である。⁽⁵⁾

この様に、メルセンヌの『普遍的ハルモニア』に散見される神学的記述を追つてみると、アウグスティヌスが好んで引いた『知恵の書』第一一章一〇節に根拠をもつ数的秩序論を受け継ぎ、これを自らの「機械学的自然学」の原理としていたことは明らかである。そしてまた、一六三〇年前後にデカルトに突き付けていた

問いは、その数年後に出版されたこととなるこの『普遍的ハルモニア』に展開された内容であつたことは十分に考えられる。既出一六三〇年四月一五日付の引用箇所を含む神学的問題を扱つた段落の前段には、線分 A B を用いて「撥弦楽器における弦の運動」を説明しているが、この時期のメルセンヌとデカルトのやりとりには「音樂理論」及び「音樂実践」の基本的問題が数多く扱われ、これを含む機械学的主題の全てが、メルセンヌの『普遍的ハルモニア』の内容に共通していたという厳然たる事実は、事実として記憶されねばならない。

そうであるからこそ、メルセンヌへの献呈が約されていた『世界論』の第七章に、デカルトの著作としては例外的に、『知恵の書』第一一章一〇節の聖句は引かれることとなつたに違いない。それはアウグスティヌス主義的数的秩序論を信奉するメルセンヌへの細やかな抵抗ではあつただろう。

たしかに、この『世界論』には、それまでの伝統的「物性理論」および「運動理論」における革新的内容が含まれていた。そもそも、一六三三年にガリレオが異端審問を受けその著作が焚書になつたのは、「仮説」としてのみ許容されていた太陽中心の宇宙モデルを、「実在的」だとしたことによる⁽⁶⁾。その場合、伝統的な学問体系における「物性理論」および「運動理論」に代わるものを探し、しかも学者らを説得できなければならなかつたはずだ。この点、ガリレオは余りに数学者であり過ぎた。これに対して、デカルトの『世界論』は全く新たな「物性理論」および「運動理論」を提示し、固い(Firmamentum)のない無限空間に無数の太陽系が生成しうるというモデルを提供している。デカルトが

ガリレオの有罪判決を耳にし、命の危険を察知したことは想像に難くない。

メルセンヌは自然現象の徹底した機械学的説明をする一方、その原理自体の基礎付けには未だアウグスティヌス主義的数論による神学的意味付けを必要としていた。これに対し、デカルトの場合、自然を支える原理自体には、最早如何なる神学的意味付けをも必要とはしていなかった。その意味で、現代の我々の自然科学観と全く同じものをもっている。⁽⁸⁾

そもそも、デカルトの処女作であった『音楽摘要 Compendium musicæ』（一六一九年）においては、メルセンヌの体系において神学における象徴的意味を帯びていた“unitas”は、単に比量認識における共通尺度として恣意的に選択するに過ぎないものとなり下がっている。デカルトは、このとき既にメルセンヌの依つて立つ「数学的プラトニズム」と決別していたのである。⁽⁹⁾

II 認識能力におけるプラトニ主義的概念

以上のように、デカルトの「自然学」及び「数学」の基礎において、ルネサンス・プラトニズムからの影響を語るべき場所はないと思われる。それでも、また別な側面に光を当ててみたい。

アウグステイヌスは『神の国 De Civitate Dei』第一巻第三〇章において、天地創造に費やされた日数「六」の完全性を示し、そこで行つた数論を、デカルトも『世界論』第七章で引いた『知恵の書』第一一章第二〇節の聖句と結びつける。更に、『三位一体論 De Trinitate』第一一巻第一一章第一八節では、この聖句中の嵩（mensura）・数（numerus）・重さ（pondus）に対応する

認識能力を意志（voluntas）・知覚（sentio）・思惟（cogito）の三つのものであらわし、これらを反省するうえにおいて、我々は自らの内にある「神の似像 Imago Dei」である三一性を自己認識するといふと述べる。

ハサウエ『三位一体論』第一五巻第一章第一節では、この「神の似像」は人間において卓越した性質であつて、そのため、動物もむつてくる“anima”とは区別して、“ratio” “Intelligentia” “mens” “animus”等々と称されるとする。人間ににおけるこの卓越した能力を表す場合、アウグスティヌスは多くの箇所において、これを“mens”に代表させる。

DICTIONNAIRE DE SPIRITUALITÉ によれば、この“mens”という概念は、ギリシア語“μόνς”的訳語であり、「視覚」に関する語と共に“oculus mentis” “acies mentis” “apex mentis”等々の形で用いられ神秘体験と結びついており、更には、プラトニ主義の影響を受けた教父的伝統で用いられ、人間ににおける「神の似像」の場として捉えられているという。ルネサンス・プラトニ主義の中心的存在であつたフィチーノ（Marsilio Ficino, 1433-1499）においても、例えば、『プラトニ神学 THEOLOGIA PLATONICA : De immortalitate animorum』では、やはり純化され神化された精神のことを“mentis oculus”もしくは“mentis acies”と称してくる。これはいわば「プラトンの第三の目」を意味するものであると思われる。

実は、デカルト哲学においても、プラトニ主義的な“mens”という概念は、中心的な役割を果たしてくる。例えば、「第一省察」において、蜜蜂による物体認識の分析をした箇所の結論部は

「明晰判明性」という概念の初出箇所であるが、これに「知性の洞見 *mentis inspectio*」が「注意す *attendo*」度合いが関わっていねむらんが明記されている(AT-VII, 31)。

この“mens”という概念は、アリストテレス=トマス主義のスコラ哲学においては、「一般には用ひられなかつた」⁽¹⁴⁾。デカルトの『省察』における概念の揺れがこれを象徴している。

デカルトが校閲したとされる第一版において、その表紙には「第一哲学についての諸省察、それらにおいて、神の存在と、人間靈魂の身体からの区別とが証明される。MEDITATIONES DE Prima PHILOSOPHIA, In quibus Dei existentia, & animæ humanae à corpore distinctio, demonstrantur.」ある。それは物体よりも一層知られるところである。De natura mentis humanae: Quod ipsa sit notior quam corpus.」であり、また「第六省察」の題名は「物質的事物の存在、及び、知性の身体からの実在的区別」である。De rerum materialium existentia, & reali mentis a corpore distinctione.」となつてゐる。更には、「第一省察」本文において、「私とは何か」を巡つて、スコラの自然学における「靈魂 (anima) 謂」による解答を批判に晒してゐる(AT-VII, 26)。

それでは、このデカルトの用いゆ “mens” というプラトン主義的用語は何に由来するものであらうか。例えば、メルセンヌがあウグステイヌスに心酔していたように、アウグステイヌスの書物からの影響かもしだれない。たしかに、ジルソンなどの研究もあるものの、これも確証を欠くというのが現状である。

仮にアウグステイヌス経由のプラトン主義の影響があるにせよ、それだけでは説明しきれない要素も存在する。その顕著な例は、「第三省察」における神の存在証明において「作動因 *causa efficiens*」のみが認められ、「無限にして一」という神概念を用ひねむらんであろう。更には、当時のキリスト教信仰にとつて問題であると考えられるのは、「第三省察」の末尾で「神の属性を私のうちに考量する」と言つていねむらん(AT-VII, 52)、「第四省察」においては、人間は「意志」において「神の似像」であり、しかも、「神と人間の意志の大きさに変わりはない」と言つていねむらんである(AT-VII, 57)。アウグステイヌスにおいては三一の関係性において類似していぬに過ぎなかつた神と人間との関係は、ここでは直接的なものとなつてしまつてゐる。これは、少なくともアウグステイヌス経由のプラトン主義ではないだろう。

これに関連して、「数学史」の研究では、クラヴィウスがヨーカリツド『原論』に付した「序説」には、プロクロスやプラトン、教父の著作からの引用がみられることが指摘されている。⁽¹⁵⁾ このことは、メルセンヌやデカルトが受けた数学教育が、プラトン主義に対しても友好的なものであったということを証左する。話はメルセンヌの『普遍的ハルモニア』に戻る。彼は「音楽的構成について」の章における命題四系二において、かつてのプラトン主義者らが「長三度」の音程を協和音とは認めていなかつたという事実を確認するために、ルネサンス・プラトニストであつたフィチーノの『ティマイオス注解』を読めと言つてゐる。即ち、これは、デカルトに近しい人物が、フィチーノを自由に読んでいたことを傍証する。

勿論、デカルトがフィチーノの著作を読んだという確証はないが、しかし、デカルトのあの奇妙な神観・人間観がルネサンス・プラトニズムを継承するものであつたとすれば、最も可能性の高い結び付きであらわし予想される。この予想を予想のままに、本報告を終えねじまつたい。

【結】

- (1) 本稿におけるデカルト著作からの引用は全てジクトの版に基づく私訳である。*Oeuvres de Descartes*, publiées par Charles ADAM & Paul TANNERY, Nouvelle présentation, Vrin, 1964-1973. あたし引用箇所を(AT-[volume], [page].[line])の形式で略記する。「永遠真理」の出現箇所は、四月一五日付(AT-I, 145.7-8)、五月一六日付(AT-I, 149.21)、五月一七日付(AT-I, 151.2 & 152.5)である。
- 「[一月]十五日には直接「永遠真理」の語は現れなくなるが、主として『世界論 Le Monde』執筆の状況について記され、尚且つ、後述する通り、この著作第七章において「永遠真理」への言及が見られるため、その内容についての繋がりを加味して、現在のデカルト研究においては、この書簡も同列のものとして扱われる。
- (2) 一六二〇～一六二三年に現れる「永遠真理」に関しては、私は基本的に村上勝三氏の『デカルト形而上学の成立』(勁草書房、一九九〇年)における第一部第一章(一～五九頁)における内容と、解釈の方向を同じくする。
- (3) しばしば「ハルモニア Harmonia」という概念は誤解されているが、日本語の「調和」あるいは「和声」という言葉のもの内包以上のものをもち、第一義的には、「音階論的位階秩序」を意味する。このことは、「ハルモニアの有用性」の章命題一〇において、神の創造した世界秩序を「共和国」と考へ、そこに敷かれた存在の位階性を神の調弦する「弦琴」の音階体系に擬え、これを「神的オルフェウス le divin Orphée」(=キリスト)が統治すると述べてゐる。
- (4) Marin Mersenne, *HARMONIE UNIVERSELLE, CONTENANT LA THEORIE ET LA PRATIQUE DE LA MUSIQUE*, ... à Paris, M.DC.XXXVI, Édition facsimilé de l'exemplaire conservé à la Bibliothèque des Arts et Métiers et annoté par l'Auteur, ..., Paris, 1986, LIVRE DE LA RYTHMIQUE, PROP XXXIII, p.429.
- (5) *Ibid.*, LIVRE DES CONSONANCES, PROP VIII, COROLLAIRE I, p.38.
- (6) *Ibid.*, PROP XI, COROLLAIRE II, p.49.
- (7) ガリレオは、既に一六一六年に、教皇庁から派遣されたガウルリーノ(Roberto Francesco Romolo Bellarmine, 1542-1621)による新学説を「仮説」として認めないとせば許すこととして、実在的であることを弁護せぬよりにとの勧告を受けている。この人物は前年に『被造物の階梯による神への知性の飛翔 De ascensione mentis in Deum per scalas rerum creatarum』という著作を公刊してゐる。世界の位階

的秩序構造に対する信念に対し打撃を与えるには、ガリレオの論拠は余りに脆弱だつたと思われる。

(8) ノの自然観に対して、例えは、デカルトが一六一八年に知り合ひ、数学的自然科学 (physico-mathématiques) の共同研

究をしたベーグマン (Isaac Beeckman, 1588-1637) などに見られる「原子論」の影響が大きやれるかもしない。し

かし、一七世紀の「原子論」は、ルネサンス期に変質した新プラトン主義的ストア自然学の “logoi spermatikoi” (種子的口門ス) に基づくものであれどもが明いかにやれてる。

c) Hiro[shij] Hirai, *Le concept de semence dans les théories de la matière à la renaissance de Marsile Ficin à Pierre Gassendi*, Brepols, 2005. 更に、オランダ人文主義者による所謂「新ストア派」の自然学の影響が指摘やれるかもしねないが、例えは、リップルウス (Justus Lipsius, 1547-1606) の『ストア派の自然学 *Physiologia Stoicorum*』(一六〇四年) に曰を通してみても、「世界靈魂 Anima Mundi」及び「精氣 Spiritus」の説に基づくものであり (チャールズ・B・シュミット、ブライアン・P・マーペン著、榎本武文訳『ルネサンス哲学』、平凡社、一九九三年、一七四頁)、ノの様な世界觀は、おしなじデカルトの排除したといふのものである。尚、リップルウスのストア自然学については、平井浩氏の主催する *Bibliotheca Hermetica* (<http://www.geocities.jp/bhermes001/>) にて、その先端研究が報告されてる。

(9) ノの点については、拙書『デカルトにおける「比例」思想の研究』(哲学書房、二〇〇一年)において十分に論証した。

(10)

ギリシア数学において、ある数の約数のうちそれ自身を除くものの総和がそれ自身となるとき、その数は「完全数」と称された。実際、 $6 = 1 \times 2 \times 3 = 1 + 2 + 3$ であり、更に、最初(最小)のものである。また、「六」は「三位一体」を象徴する「三」の三倍数である。

(11)

DICTIONNAIRE DE SPIRITUALITÉ, ASCÉTIQUE ET MYSTIQUE DOCTRINE ET HISTOIRE, BEAUCHESNE, PARIS, 1961.

(12)

Ibid., s.v. «ΝΟΥΣ» et «ΜΕΝΣ», p.461.

(13)

MARSILIO FICINO PLATONIC THEOLOGY, ENGLISH TRANSLATION BY MICHAEL J.B. ALLEN with John Warden, LATIN TEXT EDITED BY JAMES HANKINS with William Bowen, Harvard, 2001, LIBER I, Cap I 2, p.16.

(14) 実際、アリストテレス＝トマス主義的伝統では、 “mens” は “intellectus” と恣意的に置き換えられるためビノの双方を「知性」と訳して構わない。一方、プロトレン＝アウグスティヌス主義的伝統では、 “mens” を「知性」、 “intellectus” を「知解」もしくは「理解力」と訳し分ける必要が出でる。

この場合の “mens” は、人間が神に接触する能力である。

(15) 佐々木力著『デカルトの数学思想』、東京大学出版会、二〇〇三年、六七～六八頁。しかし、佐々木氏の関心は「数学の哲学」ではなく、専ら「数学の技術」に偏っているために、当時のプラトン主義自体の思想構造の解明はおろか、クラヴィウスが読んだ著作が如何なる版のものであるのかすら明らかにしてはいることは、誠に遺憾である。